



ウクライナ危機 今、祈ること

● 中野晃一（上智大学教授 国際政治学） 松浦悟郎（ピース9の会呼びかけ人）

2022年2月24日、ロシア軍が隣国ウクライナに侵攻を開始しました。あれから3ヶ月が経ち、世界は固唾を飲んでこの出来事に注目しています。日ごと、テレビや新聞で戦況報告が報道され、NATOについて、アメリカの軍事産業について、ロシアとウクライナの歴史、ロシア正教会について、バチカンの対応について、インターネットでは大量の情報が流れています。出来事の残酷さと情報の多さに圧倒され、そして二つの国がキリスト教国同士であることに、信仰者としての足場さえ、揺らいでしまいそうです。

日本カトリック正義と平和協議会は、日本キ

リスト教協議会、平和を実現するキリスト者ネットとの共催で、オンラインの祈りの集い「ウクライナを覚えて平和を祈る キリスト者祈禱会」を連続して開催しました（第1回 3月18日、第2回 4月19日、第3回 5月6日）。以下は、第2回目の祈禱会の中で行った、中野晃一さん（上智大学教授 国際政治学）と松浦悟郎司教（ピース9の会呼びかけ人）との対談です。

私たちは、この戦争をどう考え、神に何を願うべきなのか、この対談を参考に、一緒に考えたいと思います。

祈り

涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。
種の袋を背負い、泣きながら出て行ったひとは
束ねた穂を背負い
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。(詩篇126)

松浦：今日は、中野晃一先生とウクライナの問題について話し合い、少しでも皆さんの祈りのためのヒントになればよいと思います。

私たちは、とにかくまず戦争をやめてもらいたいと強く望んでいます。一日戦争が長引くたびに、どれだけの人が死んでいくのか、どれだけの市民が、地下室で水も食べ物もない状態に置かれているのか、そう想像することに、私たちはもう耐えられないのです。ロシアの攻撃のあまりの残酷さ、非人道性に戦争はここまで人を変えてしまうのかと驚きます。

そして私たちは、そうしたロシアの行為について、「あの人たち」と指差して、自分たちとは違う人たちがやっていることのように考えてしまいます。しかし「あの人たち」の誰もが私たちと同じ人間で、家では優しいお父さん、お兄さんだったはずなのです。家族の誰かが残酷に人を殺してしまう、それは本当に驚きです。

日本でも、「殺せ」と毎日繰り返し言われているうちに何も感じなくなってしまうという南京大虐殺に関わった元日本兵の方の証言を聞いたことがあります。誰もがそうなりうる、そういう意味で、これはまさに私たちの問題なのです。

こうした非人間化は、ウクライナのニュースを見る私たちにも、すでに始まっているのではないのでしょうか。

ニュースで戦況が報道されます。どこを奪われ、どこを奪い返したか。新しい武器が供給されたのもう少し反撃できるな、などと考えてしまう。私たちは、

少しずつそういう報道に慣れてしまう。でもそれは、戦場にいる一人一人が殺されていくということを意味しているのです。それなのに、こんなことあってはならないと思うことを忘れてしまう。それ自体が非人間化の始まりではないかと思うのです。だから、私たちの生活の中でも周囲に無関心になっていたり、こんなことあってはならないという怒りを忘れたりしてしまうこと自体が、非人間化の始まりではないかと思うのです。

ある野宿者が、こんな人たちは生きていてしょうがないと言って殺されてしまった事件がありました。あのとき、どんな思いで私たちはあのニュースを聞いただろう。無関心、無感情ではなかったか。そんな時こそ、私たちは問われるのではないのでしょうか。私たちの非人間化は、始まっているのではないのでしょうか。その意味で、ウクライナで起こっている残酷さは、私たち自身の問題だと感じています。

中野先生は、もう少し具体的なところから、ウクライナのことをお考えかと思いますが、どうでしょうか。

中野：私もやはり、報道に慣らされていると感じています。正常性バイアスというのでしょうか、ある種の生存本能なんだろうのですが、こういう状況をノーマルなことと受け入れてしまう。人が殺し合い、生活の場を破壊されている状況について、ニュースなどで解説を聞いているうちに、生身の人間が殺され、殺しあっているということを、捨象してしまっていると感じます。ニュースの人間性を取り去った戦況報告には気をつけないと、実際に人の生き死にかかっているということ、どれだけの苦しみがそこにあるのかということを忘れ、夢中になって見てしまうことになる。そうやって戦争のロジックに取り込まれてしまう。恐ろしい

ことだと思います。ですから、今はとにかく、正気を保つ努力が必要なのではないかと思っています。

しかし実際の戦場では、相手を非人間化しないと殺すことなどできないわけです。先ほど松浦司教もおっしゃった日本軍の残虐さについてですが、日本兵がとりわけ残虐な性質を持っていたわけではないのです。そうではなく、戦争のシステムに組み込まれ、上官や古参兵からの暴力に慣らされ、人間性を奪われ、一人の兵隊になっていったのです。1882年（明治15年）に明治天皇が大日本帝国陸海軍に下賜した『軍人勅諭』には、お前の命は「鴻毛よりも軽し」と書いてありました。自分自身が人間性を剥奪され、そして、軍属、捕虜、地域住民、慰安婦の方たちへと、人間性剥奪の連鎖が生じてしまった。これが、戦争の実態であり、日本が経験したことだったと思います。おそらく今ロシアでも、これに近いことが起きているはずです。

現在行われている民間人の大規模な虐殺や性暴力などの戦争犯罪の実態は、戦争が終わり、時間が経ってようやく全像が明らかになっていくでしょう。殺すだけではないさまざまな非人間的な行いが続いているでしょう。こうした行いに対して、私たちも当然、憤り、悲しみ、傷つきます。しかしこれを理解しようとするとき、私たちもまた、加害者を非人間化して理解しようとするのです。つまり、ロシア軍は悪魔だと言って、気持ちに整理をつけようとするのです。しかし実際には、かつての日本軍もそうだったように、残虐な戦争犯罪を犯しているロシア軍の人たちも自らの人間性に反するために、自らの人間性を押し殺しているはずなのです。人を殺したり、性暴力を犯したりということは、自らの人間性に反す

ることですから、まず自分の人間性を殺さないといけないわけですね。それを、お前は人間ではないと追い討ちをかければ、それは結局、お互いが人間性を剥奪し合うことになり、何の解決にもならないと思います。

極めて非人間的な極限の状況に直面して、我々にできることは限られています。無力感に苛まれながら、どうやってお互いに人間性を回復していくことができるのかを見つめること、これが唯一、戦争を一刻も早く終わらせる筋道ではないかと思いません。何らかの形で人間性を回復する営みに、好循環に戻していかなければならないと思います。武器を持って周りからも加勢をして、力でとにかく圧倒すればいいということでは、決着はつかないでしょう。

松浦：もう一つ痛感していることがあります。戦争には反対だとみんな言うのです。でも、戦争に反対するなら、戦争に向かって歩み始めたことにもノーと言わないといけないのではないかと。ロシアの突然のウクライナ侵攻に驚いた人は多いと思います。しかし、そこには背景があって、歴史的にも、両国は徐々に戦争の方向に向かっていったはずですよ。

1989年にベルリンの壁が崩壊しました。その時、東西の壁が壊れても南北の壁は壊れなかった、という社説記事をどこかで読んだのを記憶しています。西側陣営が勝ったとされ、南北の富の差はそこからますます大きくなり、それが今日のあらゆる戦争や紛争の原因になっているのです。本当は、東西どちらが勝ったかではなく、新しい世界のあり方を西側と東側が一緒に作り出していくべきだったのです。それが西側陣営が勝ったと言ってしまい、しかも南北の富の差はそこからますます大きくなっていったこと、それが、あらゆる戦争や紛争の原因になって

いるわけで、そうした中でロシアも徐々に西側に不信感を募らせていったようです。このように、戦争に至った背後にある原因を考えることは、今の私たちがいったい何をすべきか考えることにつながると思うのです。

二つの道があって、ほんの僅かに方向が違う。しかしそれが1km進み、10km進み、50km進んでいくにつれ、二つの道はどんどん離れてしまって、しまいには相手が見えなくなるくらい離れてしまうのです。平和を作っていく道と、戦争につながっていく道も、最初は僅かな違いであっても、いつかは完全に違う道を歩むことになってしまいます。そう考えると、それなら日本はどうだったのだろうと、どうしても考えざるを得ないのです。

日本は敗戦後、憲法ができて、これからは軍隊を捨てて平和のために生きようと言った。しかしやがて、基地が置かれ、結局、初めから軍事力によって守られていたということが当たり前になってしまった。そこから、軍事化への小さな歩みが積み重なり、今、憲法を変えろ、もっと軍事力をと、平気で言うようになってしまったのだと思います。だから今こそ、本気で平和につながる道を選び取っていかねばいけないし、平和に至らない道は今からでもノーと言わなくてはならないと思います。戦争に向かって国家という大きな歯車がいったん動き出したら、それを止めることは困難です。だからまだ小さな動きの内に止めないといけないのです。しかし一体どれだけの人が、日本社会の中で、このことを自分の問題として捉えているのでしょうか。ロシアはひどいと言いながら、日本も核を共有したらいいとか、軍事費をさらに増やしたらいいと言われて、それがなんとなく認められていく雰囲気がある。戦争につながる動きを止める、しない、とい

う選択を自分の立ち位置から実際にすることが、この戦争に反対することだと痛感しています。この辺について、中野先生、いかがでしょうか。

中野：歴史を見ると、日本においても、世界においても、第一次、第二次世界大戦の後、その分岐路があって、片足ずつを突っ込んできたと思います。一方では国際連盟が不完全だったという反省を受け、国際連合によって、より国際協調に基づいて安全保障を行っていかうという考え方が確立していったのですが、その一方で、軍事同盟の道、集団的自衛権の道もあったのです。軍事同盟、集団的自衛権は、仮想敵国を念頭に置いて同盟を結び、お互いを守り合い、戦争を防ぐ「抑止」という考え方です。それが第二次世界大戦を引き起こしてしまったのです。

だから第一次世界大戦も第二次世界大戦も、共に同盟同士の戦争で、人類は大きな失敗を繰り返してしまったわけです。それを乗り越えようと、国際連合や国際法の体系として、核兵器禁止条約や戦争そのものを違法化していくという、今日までの人類の歩みになっていったのです。しかしその両方がせめぎ合いながら、混在していたのです、しかし残念ながらここにきて、グローバル経済がさまざまな共同体の絆を壊して、権力やお金が特権階級に集中する状況になり、国際協調なんてまどろっこしいものは欺瞞だし、そんなことで平和は守れない、武力には武力で応じるしかない、という方向に突き進み、同盟を広げ、強化し、戦争への道に踏み出してしまいました。それは安倍政権以後の日本の歩みにも言えると思います。軍事同盟というのは、敵味方の論理ですから、先ほどの話で言えば、非人間化していく論理に他ならないわけです。この国はこんなことをするかもしれない、

自分たちが準備をしなければ相手が寝首を掻きにくるかもしれない、と際限なく不安が大きくなり、武力で安全を図ることになる。しかしそれは鏡写しで、仮想敵国の側もこちらが怖い、だから武力を止めない、ということになってしまいます。これは安全保障のジレンマで、抑止力を高めても結果的に軍拡競争が起きて、結局は全く抑止が働かなくなり崩壊してしまう。それは人類がしばしば失敗してきたことです。にもかかわらず、日本も敵基地攻撃だ、いや、敵基地どころか中枢機能を攻撃する能力だ、核共有だ、と極めて危険な状況にあります。しかしこれに抗っていかないと、どこかで必ず巻き込まれてしまうでしょう。

しかも、同盟の論理というのは敵味方の関係だけではないのです。今回のウクライナのケースもそうです。ウクライナはヨーロッパ諸国の代理でロシアと戦争をしているわけです。ウクライナはNATOに入っていないので、今はNATOも参戦はしていませんが、ヨーロッパからアメリカまで巻き込んだ世界大戦が始まりかねません。実はこれと同じことが日本とアメリカの関係にもあるわけです。日本がアメリカの同盟国としてさらに武装化し、沖縄に基地を作っていけば、東アジアは安全になるのでしょうか。とりわけ基地が集中する沖縄が安全になるなんて、誰も思っていないでしょう。それはむしろ、日本がアメリカの矢面に立たされ、実際には日本には関係のない戦争をさせられかねないという危険に他なりません。テレビによく出ている安全保障の専門家たちは、同盟のメリットしか話をしますが、例えて言えば、のび太に、一番強いジャイアンと組んでいれば安心安全だと言っているようなものです。しかし実はのび太はジャイアンに殴られているのです。

アメリカはこれまで、いろんな戦争に関わってきました。ロシアが初めて国際法や国連憲章に違反した国ではありません。大国のエゴが国際協調の歩みを止め、今また大国を中心にした敵味方の論理でのぶつかり合いになってきた。真っ先に犠牲になるのは、ウクライナや台湾、日本などのような国だと思います。

やはりできるだけ早く戦争を止める他はなく、それには、武力に頼ってもだめなのです。どうやって非暴力、非武装で平和を作っていくか。そのために、国際的な大きな連帯を、市民社会の側から作っていくことが、まどろっこしいことで、これをやればすぐに解決するという方法がない中で、実は一番重要なことではないかと思っています。

松浦：ありがとうございます。最後に一言付け加えたいと思います。私たちが今、一番気をつけなくてはいけないのは、戦争という現実を前に何もできないという無力感に襲われる、そういう誘惑があるということです。でも私たちには、平和を作るのはキリストご自身であり、この世に現存して平和のために働いておられ、私たちに平和を呼びかけおられるという信仰がある。詩編126にあったように、涙を流しながら小さなタネを撒き続ければ、共に平和のために働いておられる主が、それを大きく育ててくださる。だから、どんなに小さな私たちの祈りも、ウクライナの人を思いながら流す一粒の涙も、小さなタネではあるけれども、無駄にはならず、必ずそれは平和につながるということを信じましょう。そして同時に、中野先生が話されたように、現象だけに踊らされず、その奥を見ながら、私たちの問題としていくことが大事だろうと思います。これからも平和と一緒に祈っていきましょう。ありがとうございます。

FRATELLI TUTTI・兄弟の皆さん ~共に生きる世界を求めて (中編)

ヨゼフ アベイヤ司教 (福岡教区)

* 都合により本記事は前中後編の3回連続に変更いたしました

開かれた心から開かれた社会

「ともに生きる」とは何か、という問いは基本的な課題です。まず、わたしたち一人ひとりにこうしたことばはどのように響くのでしょうか。出発点は、一人ひとりの人間の尊厳を認め、自分の価値観の土台とすることです。それは、生まれたところ、社会的な地位、経済的な状況などに関係なく、一人ひとりの人間としての尊厳です。ただ、『兄弟の皆さん』(FT)で示されている「人間らしさ」というものをしっかりと心に留める必要があります。人間は、関わりの中で生まれ、成長し、生きるのです。従って、「人間らしさ」は、この関わりの中で自分が生かされ、他の人々を生かすことによって示されます。『兄弟の皆さん』の人間観はこれです。こうしたところから、皆が望んでいる正義と平和に溢れる社会が生まれるのです。

実際、人類の歴史の中で、自由、平等、正義を求める運動が繰り返されてきました。人間のうちに根強く存在している要望です。「自由、平等、兄弟性」を求めたフランス革命と人権を土台にして作られたアメリカ合衆国の憲法は、代表的な二つの例です。しかし、フランスで植民地支配は終わらなかったし、アメリカで先住民や黒人の人権を認めるにはだいぶ時間がかかったのです。現在でも、痛ましい事件が繰り返されています。旧約聖書の時代から、預言者たちが呼び掛けてきたことです。こうした歩みを振り返ってみると、改めて、極めて基本的なことが確認できます。心が変わらなければ、不正と暴力の悪循環は止まらないのです。教皇が求めている兄弟愛と社会的友愛は、この悪循環に歯止めをかけることのできる唯一の方法です。何より、人間の尊厳、命の尊厳を中心に置かなければ、それは不可能です。すべての人々に心を開き、一人ひとりの人権を守り、すべて

の人々の幸せを切に願うことがなければ、多くの人々や自然が踏みつけられてしまいます。

教皇は、すべての人々のために、三つの「T」の権利を力強く訴えています。TIERRA、TECHO、TRABAJO (耕す土地、住む家、働く権利)。

一人ひとりが人間としての尊厳を認められ、生きる権利を保障される義務が誰にでもありません。教皇が引用されている聖グレゴリオの言葉は心に響きます。「貧しい人々に何か必要な物を与えるとき、わたしたちは自分のものを寛大に与えているわけではありません。彼ら自身のものを彼らに返しているだけです」(FT119)。

皆が大きな家族として地球という家に住み、皆が大きな人類の家族として同じ食卓を囲む。『兄弟の皆さん』が求めている社会とはこういうものです。イエスの生涯のエピソードを思い出します。断食の掟を守っていないと批判されたイエスは、律法学者たちに応えます。今は断食の時ではなく、皆が共に食卓に着く時だ。しかし、これこそ彼らが拒んでいた事です。その食卓に、皆のために、罪人と見なされていた人々のためにも、貧しい人々のためにも、場を設けなければならないからです。(マルコ2・18-21)。人類の家族の食卓から一人でも排除されたら、兄弟愛と社会的友愛の実現は不可能です。わたしたち一人ひとりが、本当にそれを信じているでしょうか。毎日の生活の中で確認する必要があります。本気で信じているなら、その実現のために働くのは当然だと思います。

こうした背景の中で、教皇は難民移住者の悲劇に触れます。彼らに対して求めておられる

のは、何回も繰り返された四つの動詞の実行です。「受け入れる」、「保護する」、「向上させる」、「共生する」です。他者を受け入れる理由は、ただ一つです。同じ人間であるということです。教皇は、こうした人々の人権を守る法律の整備を求めています、その根底で、一人ひとりの価値観が問われます。

移住は、人類の歩みの一つの特徴と言えます。出会いによってさまざまな文化が生まれて来ました。多様性は、怖がるものではなく、新たな豊かさをもたらすものです。具体的に難民移住者と関わっている人々はこれを確認できたはずで、もちろん、問題もありますが、開かれた心で関わっていけば、解決の道が開くはずで

日本にいるわたしたちもこの点について考えるべきです。幸い多くの人々とグループが動いています。『兄弟の皆さん』の次のことばを忘れないようにしましょう。「世界の国々の真の良し悪しは、国としてではなく、人間家族として考えることのできるこうした力で量られるものであり、それは特に、危機の時代に試されます」(FT141)。

世界で壁が作り続けられています。バングラデシュの難民を止めるためにインドが作った3,000キロメートルのフェンス、パレスチナ人の侵入を防ぐためにイスラエルが作った壁、朝鮮半島を二つに分ける壁などです。現在でもどんどん壁が建設されています。第二次世界大戦後に作られた51の壁のうち、その半分は2000年から2014年の間に作られています。米国の雑誌アトランティックの編集長、ウリ・フリードマンは、『壁だらけの世界』という本の中でこのことを訴えています^{注1}。「壁を作る人は(国は)、最終的にその壁の中に閉じ込められてしまう」(FT 27)。開かれた心が必要です。そこから、開かれた世界が生まれてきます(FT 35)。

政治の役割は不可欠

教皇は政治に触れ、最良の政治を求めます。ある人々は、教会の指導者たちは政治的な課題に触れることを批判します。特に教会の指導者たちが示す方向性が、自分自身がサポートしている政策に疑問を投げかけるものである時です。ただ、教会の指導者たちは一定の政治思想や政党を支援するのではなく、人間の尊厳、いのちの尊厳が守られるように政治の在り方を問うのです。「教会はこの苦しみの叫びの前に震えながら、皆さん一人一人が兄弟の訴えに愛をもって応えるように求めています」(パウロ六世回勅『ポプロールム・プログレシオー-諸民族の進歩推進について-』3)。その応えには政治的な側面もあります。政治に対する発言の源泉はそこにあります。

兄弟姉妹の絆に結ばれてともに歩む人類の実現のために、政治は大事な役割を担っています。特に弱者切り捨てが多い現代社会の中で、皆の共通善を中心に置いた政治の役割はとても重要です。ただ、この目的を実現するには、最良の政治が必要です。教皇は、政治のいくつかの危険を指摘しています。例えば、権力を存続させるための手段になってしまうこと。市場経済によって左右されること。選挙で票を目指して、即効主義に陥って、一時的な効果を上げてても社会が必要とするものに応えないこと。共通善を、特にその共通善が届かない人々を中心に置かないことなどです。(続きはJP通信8月号に掲載)

注1 URI FRIEDMAN, 2016: *A world of walls*
AMISTAD SOCIAL: Claves de lectura de Fratelli tutti, Walter Kasper y George Augustin eds., Editorial SAL TERRAE, 2021.

私も『平和を実現する人』を目指したい

■ 植村隆 (元『朝日新聞』記者、『週刊金曜日』発行人兼社長)

韓国ソウル中心部の繁華街・明洞^{ミョンドン}の坂を上ると、カトリックの明洞大聖堂が見える。1898年に完成した赤レンガの美しいゴシック建築で、明洞のシンボルでもある。私は1981年に初めて韓国を訪問して以来、何度もこの建物の前に立った。この坂の上の風景が大好きだ。敬虔な気持ちになり、そして励まされるからだ。

2016年3月から、私はこの聖堂とつながりができた。この聖堂が所属しているソウル大司教区に属する韓国カトリック大学校の招聘教授になったからだ(2021年2月まで)。本来なら、神戸の女子大学の専任教員になるはずだったが、激しい「植村バッシング」で、私の進路が大きく変転したのだった。

バッシングの原因は、1991年、『朝日新聞』大阪社会部時代に私が書いたスクープ記事だった。「韓国挺身隊問題対策協議会」が、ソウルの元日本軍「慰安婦」の聞き取り調査を始めたという内容だった。この女性はその記事の3日後に、^{キム ハクスン}金学順と実名を名乗り、記者会見をした。これを契機に多数の被害者が名乗りでようになり、「慰安婦」問題が戦時性暴力として世界的に認識されるようになった。しかし、こうした「記憶の継承」に歴史修正(改竄)主義者らの攻撃が強まった。2014年1月末、私の記事が標的となった。『週刊文春』2月6日号が「慰安婦捏造”朝日新聞記者がお嬢様大学教授に」という見出しの記事を掲載し、私の記事を「捏造」だと断定。これを契機に、激しい「植村バッシング」が起き、当該大学へ抗議が殺到。結局、同大学への就職をあきらめざるを得なかった。

非常勤講師をしていた札幌の北星学園大学へも激しい攻撃が続いた。当時、同大学経済学部長だった原島正衛教授が、韓国カトリック大学校の^{パクヨンシク}朴永植総長(当時)にこうした状況を伝えたところ、朴総長が自分の大学への受け入れを



写真1 金寿煥枢機卿のDVD

表明してくれたのだ。朴総長は「あなたを招くのはアジアの平和のためです」と言ってくれた。感激した私は講義の題名を「東アジアの平和と文化」とした。

『週刊文春』の記事では、西岡力氏が私の記事を「捏造」とする談話を載せていた。櫻井よしこ氏もそれに同調し、両氏が「捏造」を言いふらした。二人とも「アベ友」だ。私は2015年に、二人をそれぞれ名誉棄損で訴えた。(「植村バッシング」とそれに対する闘いは手記『真実 私は「捏造記者」ではない』(岩波書店、2016年)で詳しく書いた。)

私は早稲田大学生時代、キリスト教系の学生寮・友愛学舎で暮らした。在日コリアンの先輩の影響で、韓国に関心を持った。光州事件の背後首謀者などとされ、死刑判決を受けた^{キムデジュン}金大中氏の救援集会やデモにも参加した。『朝日新聞』記者になってからは韓国に語学留学し、ソウル特派員や北朝鮮担当の北京特派員なども務めた。ソウル特派員時代には、金大中氏の大統領当選記事を一面トップで書いた。半世紀続いた韓国の風刺4コマ漫画『コバウおじさん』を通じて、韓国の現代史を日本に伝えたいと考えて、『マンガ韓国現代史 コバウおじさんの50年』(角川ソフィア文庫)を出版したこともある。そういう体験を基に、韓国語で授業を行った。

韓国での宿舎は、大学内にあるゲストハウス

だった。建物には「^{キムスファン}金寿煥国際館」という名前が付いていた。大学の初代理事長だった金寿煥枢機卿（1922～2009）は韓国の民主化運動を支えた人道主義的な人物として韓国民にとっても尊敬されていた。しかし、学生たちはあまり枢機卿のことを知らなかった。このため、授業で枢機卿を紹介したDVDビデオを見ながら一緒に学ぶことにした（写真1）。民主化を求めて明洞聖堂に籠城した学生たちを枢機卿が守った話や、再開発で自宅を失った貧しい「撤去民」を支援し、明洞聖堂の敷地内に設置されたテント村で住ませた光景などが映し出されている（写真2）。そうした姿を見る度に涙が出た。学期ごとに、ビデオを繰り返し見ているうちに、枢機卿をますます尊敬するようになった。

日本で私は小さなパンフレットを手にした。カトリック中央協議会発行の「戦後70年司教団メッセージ 平和を実現する人は幸い」（2015年刊行）だ。侵略戦争の反省と戦争放棄への決意が綴られ、「過去の戦争の記憶が遠いものとなるにつれ、日本が行った植民地支配や侵略戦争の中での人道に反する罪の部分を書き換え、否定しようとする動きが顕著になってきています」と指摘。それが、改憲の動きと連動していると警鐘を鳴らしていた。戦後50年のメッセージもあった。「平和な世界の実現」のための7つの具体的活動が示されていた。「第二次大戦で踏みにじられた人々の人権の回復のための努力」「被差別部落や在日韓国朝鮮人らの人権尊重と差別解消の活動」「青少年を対象とした平和教育の促進」などが列挙されていた。それは、私がやらねばと考えていたことと、ピタッと一致していた。教義には全く無学だが、こうしたメッセージを受け取る人々の仲間になりたいと思った。フランシスコ教皇のTED Talksに感激したこと（その中の「善きサマリア人のたとえ」の話は、バッシングにあった私を助けてくれた人々のことと重ね合わせると、ジーンと来た）や、映画『ローマ法王になる日まで』（2015年）に感動していたことも大きな理由だった。そして私は2018年11月、大学校内の聖



写真2 ビデオに出た明洞大聖堂

堂で受洗した。クリスチャンネームは、金枢機卿と同じ「ステファノ」にした。正義と平和を蹂躪する「アベ政治」「アベ政権」からの「魂の亡命」のようなものだと思う。

植村裁判では、両被告のインチキぶりを明らかにし、櫻井氏は訂正記事を出した。私の記事が「捏造」でないことを十分に証明できたと思う。しかし、両訴訟とも敗訴が確定した。不当判決だった。そうした「植村バッシング」を記録したドキュメンタリー映画『標的』（西嶋真司監督）が完成した。札幌教区の「正義と平和協議会」は21年7月に、この上映会を開催し、私の報告会を開いてくれた。映画で、私は監督のインタビューに答えて、「私のことを見過ごせなかった人々への感謝」を語っている。これは教皇の話に影響を受けたものだ。カトリック札幌教区のクリプトでの私の母親の納骨式のシーンも出てくる。この映画を同会のメンバーである西千津さんが、全国組織の「日本カトリック正義と平和協議会」につないでくれた。同協議会は、この映画の推薦団体になってくれ、22年5月14日にはカトリック麹町聖イグナチオ教会ヨセフホールで上映会とトークが開かれた。一方で、日本基督教団東京教区北支区常任委員会も推薦団体になってくれた。早大生時代にキリスト教の寮に入ってから、40年以上たって、キリスト教世界との縁が急に深まった。試練は新しい出会いを私に与えてくれた。この縁を大切に、私も「平和を実現する人」を目指したい。

沖縄復帰50年

山田圭吾（那覇教区）

1952年4月28日に日本から切り離された奄美諸島や琉球列島はアメリカ軍に統治されていた。日本の施政権の及ばないことにより日本国憲法の埒外にあり、アメリカ軍基地から派生する凶悪犯罪、事件・事故のあまりの酷さ、多さから、一日も早い「異民族からの解放」を願い「祖国復帰運動」がなされていた。53年12月25日、奄美諸島が返還された際には「我々は本当の日本人になった」として喜んだと言う。

そして72年5月15日。沖縄が復帰したが、果たして日本は帰るべき「祖国」だったのか。「本土」にはなっていないのだから「本土復帰」ではなく「日本復帰だ」、ヤマトという「異民族」による1872年の「琉球処分」以来の「再併合」ではないか、「琉球国」として独立すべきだ、など、同じ日の出来事が様々に表現されている。

奄美の復帰以来、琉球諸島に住んでいた人たちは、沖縄では「非琉球人」として外国人扱いされ、「写真貼付、指紋押捺」が強制された「在留許可証明書」の24時間携帯が義務付けられた。公職追放され、職業、結婚などでも、日本からもアメリカからもそして沖縄からさえも差別され、様々な苦難を味わうことになったのである。

54年に沖縄で生まれ育った私も14歳になった68年「在留許可証明書」を持たされた。父親が奄美出身で、本籍が鹿児島県だったからである。その在留許可は「琉球列島高等弁務官」（アメリカ軍の最高司令官）からのものである（写真）。軍人に支配されていたことが如実に表れている。これは復帰によって廃止された。

「もはや戦後ではない」と言われ、経済成長を謳歌しオリンピックだ、万博だと日本中が浮かれていた頃、沖縄の人たちが凄惨な状況から抜け出さんがために「日本復帰」を願ったことは当然のことだったかもしれない。朝鮮戦争、ベトナム戦争に出撃する若いアメリカ兵と沖縄の女性の間生まれた子どもたちは、父親を知らず、沖縄ではアメリ

カーと言われ、アメリカに行けば沖縄（人）と言われ、「自分はいったい何者か」と自問する日々から精神的に病んでいった人も多いという。

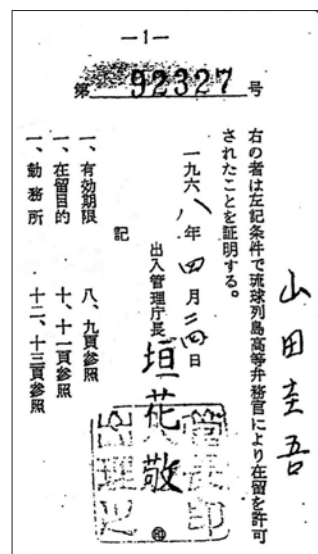
1900年にできた「治安維持のため」の「精神病者監護法」は、その実態のあまりのひどさに本土では50年には

廃止されたのに、沖縄では72年の「復帰」の日まで残されていた。「家畜のほうがまだましだ」と言われたほどの劣悪な「私宅監置」は、立つこともままならないほどの小さな監置小屋に閉じ込めるもので、そのまま亡くなった人も多かったのである。

「核抜き・本土並み」のスローガンは反故にされ、復帰前とほとんど変わらない軍事基地の多さ。アメリカ軍関係の事件・事故は一向に減らず、むしろ日本政府からの沖縄への虐待はますますひどくなっていると感じている人は、復帰前のほうがよかったとさえ言い出すほどである。確かに経済的には豊かになったように見えても、本土との大きな経済的、教育的格差、子どもの貧困など、課題は山積している。

日本から「独立」を言う地域が他にあるだろうか。なぜそんな風に考えなければならないのか。「国」とは、「国籍」とは、「人種」とは、「民族」とは、「国境」とは一体何なのか。私は何者か、どこに属しているのか。

天地万物を、人類を創造され、それらをすべて「極めて、良かった」ものとされた神様の元に帰ろうではないか。「わたしたちの本国は天にあります」（フィリピ3・20）



琉球列島高等弁務官発行の山田圭吾さんの「在留許可証明書」



「前職」のころから、しつこくくりかえしていたお話 ～身を起こして頭を上げなさい～

■ えなこさいち（生活介護事業所職員）

このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。（ルカ 21・28）

わたしが心揺さぶられる福音書のことばのひとつです。

「このようなこと」、それは紀元66年に起こったユダヤ戦争（ローマ帝国の支配下に置かれたユダヤ属州の人びとによるローマ帝国への大規模な反乱）におけるエルサレム滅亡（70年）を前提にしていると考えられています。

「異教徒」であるローマによって神の都エルサレムが滅ぼされるという体験は、ユダヤの人びと、そして初代教会の人びとにとって、たいへん大きな衝撃であり、これこそが世の終わりだと思われました。四福音書が書かれた70~90年代においては、まだ生々しく思い起こされていたことでしょう。

しかし、それほど大きな悲しみに打ちひしがれているのに、世は終わることなく続きます。当初は、イエスの「昇天」後、ほどなく終末が訪れ、救いが完成すると考えていた教会の人びとは自分たちの使命を捉えなおしはじめます。

飢饉、疫病、自然災害、そして暴動や戦争。人びとはなすすべを知らず、不安に陥り、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失う……。

イエスは、そのような時こそ身を起こして頭を上げよ、解放の 때가近いから、と告げるのです。時間的にみれば、おそらくイエスの肉声ではないのですが、キリスト者はイエスがいのちをかけてこの地上で証した福音から、イエスの思いをくみとって福音書に記したのです。

危機的な状況において「解放の 때가近い」と宣言するのは、イエスがそうであったように、目の前にある現実に向き合い、福音を実現していくからです。“解放の時”は、困難な状況においても福音を生きぬく人びと、つまりキリスト者にゆだねられている。それこそ教会が自覚し

た使命ではないでしょうか。

では、イエスはその生きざまにおいてどのように福音を証したのでしょうか。

福音書には、日本語訳聖書ですと「深く憐れむ」という表現が頻出します。新約聖書のギリシア語原文においては“*splagchnizomai*”ですが、このことばの元来の意味は「はらわたがちぎれる（引きちぎられる）」です。

抑圧され、忌避され、排除され、いやしめられ、蔑まれ、人の尊厳と魂のよりどころを奪われた人びとを前にしたイエスの心情をあらわす際に用いられています。

イエスがどのようなかたであるか、わたしは「苦しむ人、悲しむ人を見過ごすことができない。その姿勢を生き抜くことで、イエスは人の本来の生きかたを回復した」とひとこと言いきってよいのではないかとさえ思っています。「はらわたがちぎれる」。他者の痛みを自分の内側から起こる激しい痛みとして受けとめる、強く共感する。人の苦しみ、悲しみを前にして打ち震える。これこそ、イエスをとおして証されたいのちの与え主である神の思いであり、いのちある者がひとりも損なわれてはならないという意味での平和（聖書において平和と訳されるのは、ヘブライ語のシャローム（*šālôm*）。元来の意味は「欠けたところのない」）を実現する礎であると思うのです。

ですが、この瞬間にも、どこかで誰かが傷つけられ、苦しみへと追いやられています。福音書が著された時代と同じく、あるいはより深刻に、世界は、飢え、病、災害、そして暴動や戦争の直中にあります。でも、だからこそ、福音を知るわたしたちは、身を起こして頭を上げ、解放を求める使命を生きるのです。

今回が最後とのこと。稚拙な駄文におつきあいいただき、また「元 司祭」のはぐれ者にこのような場をくださいましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。

目次

- 1 ウクライナ危機 今、祈ること……………中野晃一 松浦悟郎
- 6 報告・正義と平和協議会・全国会議公開講演会
(2022年3月4日オンライン)
FRATELLI TUTTI・兄弟の皆さん～共に生きる世界を求めて
(中編)……………ヨゼフ・アペイヤ
- 8 私ら『平和を実現する人』を目指したい……………植村隆
- 10 沖縄復帰50年……………山田圭吾
- 11 (連載最終回)シロツメクサの花かんむり
「前職」のころから、しつこくくりかえしていたお話
～身を起こして頭を上げなさい～……………えなこさいち
- 12 まんが 連載第6回「神学生トマス」

2022年4月号(233号)についての訂正とお詫び

2022年4月号(233号)P.8 中井淳「平和の架け橋となっていく」の写真キャプションに誤りがありましたので、お詫びと共に以下のように訂正いたします。

誤: 子どもとみんな食堂「クロスひよりやま」

正: 子どもとみんな食堂「ロクスひよりやま」

ロクスひよりやまに関係する方々には、特にお詫びいたします。

表紙写真 2022年5月3日、晴天に恵まれるなか、東京都江東区の有明臨海広域防災公園にて、3年ぶりの憲法集会「改憲発議許さない!守ろう平和といのちとくらし 2022 憲法大集会」が開催され、15000人の参加者がありました(主催者発表)。ウクライナ戦争によって、ヨーロッパ各国は防衛意識が高まり、日本もそれに合わせて「やはり軍備は必要なのではないか」という声が拡がっています。「そんな今こそ、私たちのいのちとくらしを守るために、非暴力平和にもとづく日本国憲法を大切にしよう」と、声を合わせて訴えました。



苦虫のつぶやき

参議院選挙の情勢

2022年7月には、参議院選挙がある。私は、昨年の衆議院選挙が終わった翌日からある護憲派の党の党首の事務所に通っている。6年前の選挙の際にお手伝いをしたご縁である。6年振りに支援者名簿に電話するも支持離れ、高齢化と空振りが多い。実際、党を離れた議員、党員が半数近くいるらしい。マスコミ報道での「参議院選挙予測」などを見ても得票率2%以下と出ている。それは、当選者なし、政党要件なしを意味する。しかし、憲法集会、脱原発集会、狭山集会、フラワーデモ、沖縄問題、貧困、ジェンダー、とどんな課題の集会に行っても彼女(党首)の姿があり、市民とともに歩んでいる姿勢には頭が下がる。まさに政治家としての正しい姿である。

一方、現政権を握っている方々は、ロシアのウクライナ侵攻まで理由にし「憲法改正」を目論見、防衛といいながら軍事費を増やし、核のシェアリングまで言い出す始末だ。

今回の選挙で「護憲派」政党が圧倒的に勝つのは、難しい状況だ。しかし、このままでは本当に憲法改正までまっしぐらになってしまう。投票に行かない50%の人々に声をかけ、話をして現実を知ってもらい投票に行ってもらおう。これしか道はない。私はミサで会うシスターには修題院の中で話をして欲しいと話し、電車の中、病院の待合室などで「あの方、頑張っているよね。」「危ないらしいから応援してね」と友人たちと話をして欲しいと伝えている。7月9日までなんとか頑張っていきたい。皆さんも必ず投票に行ってくださいね。

齊木登茂子(日本カトリック正義と平和協議会委員、東京教区)

編集後記

5月14日(土)、久々の対面式集會を都内にて開催した。映画『標的』の上映会と映画の主人公である植村 隆さんのトークである(カウンターは援助修道会のシスター古屋敷一葉、p.8もご覧ください)。だいぶコロナも落ち着いたとはいえ、まだまだ感染者は出ており、慎重を重ねての開催だったが、植村さんのオープンな人柄と、正義への熱い思いに、会場は沸いた。植村さんは、教皇フランシスコに胸打たれ、司教団メッセージに共感して、これからは正義と平和協議会の仲間になりたいという。コロナで活動範囲が狭くなり、ついに戦争が起きて、憲法も危うい。これまでの正義と平和の活動はなんだったのと力を落としていた矢先、大きく背中を押され、ぐいと腕を掴まれた。神様は必ず、良いものをくださる。ありがとう、植村さん。(h.)